

## 特別企画 座談会（第I部）

## 滋賀大生に期待すること

## 座談会出席者

- 戸田一雄  
前松下電器産業株式会社副社長
- 齋藤俊信  
滋賀県教育委員会教育長
- 成瀬龍夫  
滋賀大学長
- 力石伸夫  
滋賀大学理事

現在、大学をめぐる環境が大きな変革の時代を迎えています。一つ目は全入時代、少子化による競争激化という、大学の学生募集環境が非常に厳しくなっていること、二つ目は、運営費交付金が毎年1パーセントずつ削減され、経営基盤面での厳しさが迫っていること、三つ目は、新しい「教育基本法」が施行されたことです。さらに最近の議論では、例えば、経済財政諮問会議における成長力加速プログラムのなかで、成長可能性拡大戦略において大学への期待の高まりがある一方で、運営費交付金の競争的配分、すなわち成果主義の導入という提案がなされるといったように、大学は大変革の時代を迎えています。

そのような背景を踏まえ、滋賀大学の今後の在り方をさまざまな角度から語っていただきます。

今回の座談会には、教育と、経済・社会のそれぞれの面でトップリーダーである、齋藤俊信滋賀県教育委員会教育長と戸田一雄前松下電器産業株式会社副社長（現在は顧問）の両氏にご出席いただきました。成瀬学長を交え、「学生について」、「教育研究について」、そして「今後の大学経営について」など、多面的に語っていただき、究極は、滋賀大学のブランド力の強化に結びつけていきたいと思えます。

本座談会は2部構成とし、今号では第I部として「滋賀大生に期待すること」をテーマに語っていただきます。

## ● 「滋賀大学で学ぶ」で訴えたこと

**司会** まず最初に、学長から、法人化前後の滋賀大学における「学部教育の改革」や「学生支援」の改革等の実績について、お話をいただきたいと思えます。

**学長** 全学教養教育科目に「滋賀大学で学ぶ」という授業があり、学長も1回担当します。私の講義テーマは「人間としての自立と学問のすすめ」というもので、自立するために何が必要かを確認するために、福沢諭吉の『学問のススメ』を紹介し、世の中は自立する賢人と自立できない愚人を基準とする格差社会になっているが、賢人と愚人の違いは学問するかどうかであり、学問によって賢くなれば、個人としての自立、ひいては社会、国家の独立にもつながるということを説いているという話をしました。

また、福沢諭吉は、まず実学、彼はサイエンスとも言っていますが、を勉強し、あとはあと回しにせよと書いていますが、実は、大学というのは実学と同時に、哲学や倫理学、論理学、歴史や文学といったことも教えます。これらが虚学と言われているわけですが、その実学と虚学の関係をどう考えるかということも説明しました。350名の授業でしたが、すごい反響があります。特に、格差社会のなかで、個人の自立と学問の関係というものがよく分かったのだと思えます。

いまは大学が大衆化しており、多くの学生が実学志向です。経済学、経営学は実学です。ところが、実学をしっかりと勉強するのはいいのだけれども、社会に出て、企業や社会のリーダーになりたい、社会を変えていきたいと考えるのであれば、やはり「社会とは」さらに「人間とは」という本質を考え理解する力を持っていないとだめだということです。そこに実学の限界と、虚学の重要性というのが出てきます。

もう一つ、大きな反響がありましたのは、経済学部が戦前から教育理念としてきた「士魂商才」です。武士のような教養と商人のような才覚ということですが、これは福沢諭吉が提唱したことなのです。士魂という言葉には、しっかりと虚学と実学を勉強しろという意味が含まれています。

そういう士魂と商才とを合わせ持った勉強を滋賀大学でやってほしいと訴えたことが、学生諸君には、反響の大きい提起になったと思えます。

## ●「教育改革」の取組

次に、大学の教育改革の最近の動きについて、申し上げます。

まず学部で言えば、教養教育と専門教育（専門と専門基礎）を、どのようにカリキュラムに組んでいくかということになります。滋賀大の場合は、全教員が教養教育にかかわるという全員出動態勢としています。

全教員がそれぞれ自分の得意とするテーマで講義科目を開くわけですから、沢山の科目数になります。そこで、いくつかの分野に編成し、特定の主題領域について力を入れています。

例えば、「環境」、「地域文化」、そして「ライフデザイン」といったものです。

経済学部はいまから5年ほど前に「三層教育構造」を導入しました。これは、導入教育、途中教育、卒業教育という教育構造で、特に特徴的なのは途中教育で、ここにコア科目を設定しています。

経済学部であれば、原論、会計学、統計学といった、勉強して当然の科目というものがあります。それまでカリキュラムのなかではっきり位置付けされていなかったこれらの科目を、必修や選択必修と位置付け、全部で9科目ぐらいを必修に位置付けました。

そして、学生のコア科目の履修を支援するために、**陵水学習教育支援室**<sup>\*1</sup>をつくり、また**S A (Student Assistant)**<sup>\*2</sup>という制度を設け、成果を挙げています。

コア科目数が多いので、経済学部の学生諸君には相当厳しいハードル設定となっていますが、学生に聞いてみると、そういう高いハードルを乗り越え、経済学部生として基本的な勉強ができたということが、後で大変よい試練だったという感想が出ています。

現在、経済学部では、このような教育改革をまとめて、**特色G P**<sup>\*3</sup>に申請中です。これは、世界標準を志向する独自コア教育の展開、要するにグローバルスタンダードの教育を経済学部としてやっているということです。

もう一つ、経済学部で大きな特色になっているのは、先輩による教育支援です。「リーダーシップ論」等の陵水協力講義を開講していますが、戸田先生に特任教授をお引受けいただいたのも、先輩が教育を支援していただくということです。

また、教育学部では、平成17年度に、学校教育教員養成課程を全面的に再編成し、四つの系と17のコースとしました。

この狙いは、非常にたくさんの分野で学生が学べ、専門教育の充実を図ったことにあります。学生が主体的に選択して参加するというシステムにしました。従来は、1回生から2回生まで研究室に属し、先生との濃密な人間関係の中で教育を受けてきたのですが、一部を除いて、必ずしもゼミに属さずに教育を受けることも可能となりました。主体的に勉強するようにしていただきたいと考えています。

そして、今年はいままで取り組んできた改革の成果をチェックしなければならない年になります。

**司会** 滋賀大学の教育の現状は、いま学長からお話いただいたとおりですが、お二人からご自身の学生時代を振り返っていただき、大学で受けられた教育のどのようなことがその後の人生において役に立ったか。あるいは、もっとこんなことに力を入れておけばよかった、こんなことに取り組んでおけばよかったといったことについてお伺いしたいと思います。

## ●学生のうちにやっておいてほしいこと

**戸田** いまの学生は、早くて1年先、遅くて4年先には社会人になる、社会に入って一人前の人間としての歩みを始めることとなります。では、その先にある社会というのは、あるいは、例えば私の育った会社、会社生活というのは、どんな世界であるかということ、よく分かっておいていただきたい。学生のうちから、こんなものかということ、予め知っておくことは大事なことはないかと思っています。

\*1 陵水学習教育支援室 学生への学習支援、教員への教育支援、学部へのFD活動支援を行うことを目的とし平成17年4月1日オープン。開放型学習スペースも用意され、活気に溢れている。

\*2 S A (Student Assistant) 従来からあるT A (Teaching Assistant) が大学院生による授業補助であるのに対し、S Aは学部上級生が授業を補助するもの。

\*3 特色G P 「特色ある大学教育支援プログラム」。大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものを選定し、選定された事例を広く社会に情報提供するとともに、財政支援を行うことにより、国公私立大学を通じ、教育改善の取組について、各大学及び教員のインセンティブになるとともに、他大学の取組の参考になり、高等教育の活性化が促進されることを目的としている。



社会人は、会社に入って仕事を割り振られたら、その日からその分野は任されます。プロとして期待されるわけですが、それは最低限、的確な判断力を持ち、またタイムリーに、具体的な策を、少なくとも自分の与えられた世界のなかでこなしていく、これが最低条件だと思います。

いま振り返ってみますと、そういう的確な判断力というのは、二つのことがしっかり身に付いていることが大事だと思います。一つは、何が正しいか、何をすべきか、ということをしっかき見極める力を持つということ。もう一つは、いま全体がどういう状況にあって、これからどう変わっていくかという、変化が読める力です。これは、学生生活の4年間に自分なりにやってきたことがベースになってきます。会社に入ってからでは、もう入ったときから一つの判断を求められているわけですから、むしろ遅いということになります。大学時代というのは、自己形成に役立つ重要な時代じゃないかなと思います。

自分もたいへんいい経験をさせてもらったのですが、大学時代の勉強というのは、先ほど実学という学長のお話にございましたが、そういう実学ということだけでなく、虚学だとか、あるいは、もう少し広げると毎日の生活そのもの、大学の一日一日が勉強だったと思っています。

やはり自分の専門の勉強だけをやるということだけでは、幅広い勉強にはならない。といって、一つの専門的なところをきっちり極めずして、幅広く何でも知っているというだけでは、これもまた雑学を知っているだけということになります。やはり勉強、いろんな実学、虚学、それに加えてクラブ活動やサークル活動にもしっかりと全力かけてぜひやっていただきたいと思います。

勉強の面で言いますと、どちらかと言うと受験勉強というのは入るための苦しさが先に立つ勉強で、40何年たった今でも、まだ苦しさが思い出されます。やっぱり大学の勉強というのは、逆に、本当に面白い勉強でないとはだめです。

あとで、いろいろと入ろうとする会社を判断をするときに、大学時代に学んだ日本経済の動きの話等は、自分でも非常に面白く役立った。

もう一つは、クラブ活動です。僕は山岳部に所属しておりましたけれども、振り返ってみますと、山岳部の活動は、苦しさ80、楽しさ20というところなんです。その苦しさというのは、ある頂上の9合目をもう少し越えるところまで苦しさの連続。30分に1回、5分の休憩のときに、ほっとするぐらいのもので、本当に苦しさの連続です。しかし、残りの、本当に0.5合のところから得られる幸せというのは、それこそ至福の幸せ。そういったことを体験してきました。

一步一步を歩いていく、あるいは岩をよじ登っていくときの苦しさを、いろいろと乗り越えてきた。この根性みたいなものが、ずいぶんと会社に入ってから役に立ちました。

同じような苦しさが会社にあるわけじゃないですけども、しかし、非常に難しいターゲットというものが、会社に入ってもあるわけです。そういうターゲットを乗り越えるためにも、そういう学生時代の苦しい体験というのは、本当によかったなと思います。

ただ、あの当時は、グローバルな視点というのが僕にはあまりにも少なかったと思います。もっともっとグローバルな勉強をすべきだったと思っています。

## ●「建学の精神」から学んだこと

**齋藤** 私の場合は私立大学だったのですが、「国家の良心をつくる」という建学の精神がありました。「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」ということで、大学の正門のところに碑が立っていて、その碑を毎日見ながら通っていました。常日ごろ通う大学で目に触れるもの、あるいは学ぶものというものが何であったのかということが大事で、いろんな意味で学んだと思います。そういう意味で環境が大事だと思います。

滋賀大学も、特に経済学部は彦根城がすぐ見えるところにあり、環境に恵まれていると思います。大学では、実学といわれる専門の勉強もしましたが、教養科目のような、何のためにこれを勉強するのだろうかと思うような科目でも、とにかく好奇心が強い方でしたので、いろんな講義を受けました。いま考えてみると、そのおかげで、幅広い知識とさまざまな経験ができたと思います。

そして、私にとって非常に大きかったのが、クラブ活動です。私はESSに所属しておりました。東京オリンピックが開催され、かなり英語熱も高まっていた頃のことで、私が学んだ京都は、海外から来られる観光客の方も多く、海外の方々とお話ができるようになりたいと考えてクラブ活動を始め、そして国際的な



戸田 一雄氏  
昭和39年3月滋賀大学経済学部を卒業し、松下電器産業株式会社へ入社。数々の要職を歴任後、平成15年6月副社長に就任し、現在は顧問。松下国内マーケティング大学学長も務める。19年4月滋賀大学特任教授に就任。



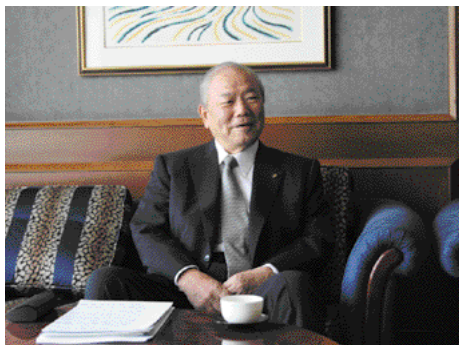
齋藤 俊信氏  
滋賀県教育委員会教育長  
昭和42年3月同志社大学経済学部を卒業し、松下電器貿易株式会社へ入社。欧米5カ国で22年間勤務、松下電器産業関連会社社長を歴任。平成16年4月滋賀県教育委員会教育長に就任。

仕事に就きたいと考えるようになり、それが就職にもつながったわけです。

学生時代に、私は香港大学の学生20数名を受け入れて交流会をやったり、E S Sのメンバー 20名前後を募って、香港大学、台湾大学、琉球大学の交流会を私自身が企画し、私はその団長として、貨客船で神戸港から出ました。

この経験を通して非常に視野が広がったと感じました。そして松下電器に就職し、海外の事業を担当させていただきました。

現在、都道府県の教育長の中で、民間出身の教育長は私ただ一人ですが、現在考えているのは、国際社会で通用する人づくりです。日本はこれから、好むと好まざるとにかかわらず、世界と対峙して生き抜いていかねばなりませんから、しっかりと生きる力をつけて、教育していこうということです。大事なこととして、五つのポイントを掲げています。



戸田 一雄 氏

一つは、公の心を持つということ。何のために勉強するのか、何のために働くのかということ深く考える。自分のためだけでなく、自らの働きを通して社会の発展に貢献するというような公の意識をしっかりと持つことが大事です。

二つ目が、日本人であれば、日本人としての誇りと自信を持つということです。日本人としてのアイデンティティーをしっかりと持つということが世界に通用することであって、自分のふるさとや国のことをしっかりと理解し、学んで、それに誇りを持つことが大切です。そうすれば、ほかの国の伝統文化も尊重するという気

持ちが出てくるわけです。

三つ目が、相手の身になって考え行動できるということです。どちらかという自分さえよければいいというような風潮がありますが、やはり相手の身になって考え、それを行動であらわせる人間になるということが大事です。これは人間関係づくりにおいても非常に基本となる考え方で、社会へ出て、非常に大事なことです。滋賀県では近江商人の「三方よし」、つまり、売り手よし、買い手よし、世間よしという、非常に哲学的な先人の教えがあります。これを、教育の世界でも実践していくことが大事だと思っています。

四つ目が、国語力を身に付けるということです。国語の力を付けていくためには、やはり書くということが大事だと思います。いまはパソコンの時代になっていて、どんどん書かなくなってくるのではないかと非常に危惧しています。書くことによって、論理的な考え方を組み立てることができたり、問題が整理されて、考えも深まると思うのです。読み、書く、聞く、伝え合う、また表現するという意味で、自分の思いを言葉でしっかりと表現できないと国際社会でも通用しません。

五つ目が、人間的な魅力を持つということです。専門的な知識だけでなく、教養、またクラブ活動や先生方との交流、大人のひととの交流等も、ぜひこの大学時代にしっかりとやっていただきたい。そうすることで、人間的な幅を広げ、自分の得意なことをとことんやる。そして自信を持つ。自信を持てば、その人なりの魅力が出てくると思います。大学で、自分の魅力となるものを身に付けていただきたいと思います。

私自身、大学を振り返ってみて、この五つのポイントが本当にしっかりとできていただろうか、という反省は大きいものがありますが、充実した大学生活を送ることが何よりも大事なことではないかと思っています。

### ●大事なのは「不易流行」

戸田 先ほど、学長が言われた「生徒が生徒を教える」ということを、実践してみようと思います。一方通行の教育も当然必要ですが、私は社内の塾活動の進め方そのものを基本的にはディスカッション主体でと考えています。チームのなかのディスカッション、そして、それが集まってチーム対チームのディスカッション、そういうことをできるだけ増やしていくようにしています。いまの社内の塾活動での一つの狙いは「不易流行を知ること」、つまり何が正しくて、普遍かということ、それから何を変えなければならないかということ、これをしっかりと勉強するということです。

もう一つは、どう人間性を高めていくかということが、ともすればかすれてきています。ですから、感謝の心とか、いたわりの心とか、そういうことを仕事の中で大事に出来るリーダーになってもらいたい。このことは、企業の内であれ、外であれ、一緒ではないかと思っています。

司会 企業の中で何ごとかを成していくという場合、環境も変化するわけですから、大事なものの考え方を曲げてはならない基本となるところの「不易」と、変化に対応していく「流行」というところのバランスをいかに取っていくのか。「不易流行」が極めて大事だということをつくづく思いますね。

齋藤 知・徳・体というのは、大事だなと思います。私は人間関係を恐れるということではなく、失敗は、逆に言ったら自分の将来の力になるんだという思いで、どんどんぶつかって行ってほしいですね。



## ●今なぜ若者が会社を辞めるのか？

**司会** 最近の若者は企業に勤めても3年以内に離職する人の比率が3割を超えているという現状が一方であります。

冒頭に戸田さんは、企業というのは組織で動くのだから、そのなかで自分で解答を見つけて、やりがいに結びつけていくと話されましたが、一方で若者の離職率が高まっているという現実がある。軽々に離職することのないように、学生時代から何を心がけ、何をしておいたほうがいいのかと思われませんか。

**戸田** 僕は大学時代の授業で、ほんとうに衝撃を受けた言葉がありました。会社に入って私共の松下幸之助創業者が同じことを言っていたのでびっくりしたのですが、「人間は社会の公器である」というものです。これは、大学生の間にぜひ学んで頂きたい言葉です。

いまの若い人が、決してレベルが低くなったと僕は思っていないですが、レベルの高い人と低い人の差がものすごく出てきているというのも事実だと思います。

毎日毎日の生活を見ていて、めりはりのある人、めりはりのない人がいると思うのです。まったくめりはりなく生きている人は、もう授業のはじめから一番前でべたっと寝ています。そういう人は、僕は損だなと思うのです。せっかく授業に出るのだから、学んで帰ろうという迫力がないとだめだと思います。何に値打ちがあるかというのを見極めるといふ癖を付けないと、めりはりという行動は生まれませんんじゃないかなと思いますね。もったいない。

最終的には、やっぱりもっとロングで自分の生き方を考えてやって、自分を大事に、自分をかわいがる、そういう人になってほしい。そうすれば、他の人も大事にするはずだから。

参考までに、東京大学の月尾先生から面白い調査結果について教えて頂きました。学生さんに対する調査なのですが、「あなたは今現在の楽しみのために生きていますか。それとも、自分の将来のために生きていますか。」という質問をしたところ、1970年の調査で、「いまのために生きています」というのが27.6%、「将来に備えて生きています」というのが53.6%でしたが、2003年の調査では、「いまのために生きています」が56.4%、「将来に備えて生きています」が27.3%だったとのこと。この30年の内にまったく逆転したんですね。日本人はアリからキリギリスに変身したわけです。

果たして今、楽しみがあるのかどうかというと、決してそうではなく、のんびんだらりと生きているという人が、この56.4%のなかにもものすごく入っているのではないかと思います。もっともっと目的意識を持って、しっかりと自分をかかわりがった人生を歩んでほしいなと思います。

**齋藤** せっかく就職したところを辞めるというのは、自分は将来どうしたいんだということが分わからないままに就職してしまったが故に起こってきているのではないかとみえています。ですから、キャリア教育を、小学校、中学校、高等学校と、その発達段階に応じて意識しながら、教育の現場でもやっていかないとけないと考えています。

大学でも、教育を志向する学生が学校の現場を体験するのは大事だと思います。教職の課程のなかに教育実習がありますが、それでは充分じゃないと思います。

例えば、石山小学校と滋賀大学の教育学部が連携をして、教育現場に学生さんが来て、子どもたちを支援するという実際の体験をしていただいています。非常にいい取組だと思います。

そういった体験をすることで、将来自分がこの仕事にやりがいを感じ、これだったら私はやれるし、やりたいという気持ちが自ら出てくる、そのことが大事だと思います。

## ●いまの滋賀大学生に期待すること

**司会** 好奇心を持っていろんなことを体験していくことは、学生だからこそ許されるチャレンジだと思いますね。

さて、いまの滋賀大学生に期待することやアドバイスがありましたらお願いします。

**戸田** いま京セラの稲森名誉会長さんの『生き方』という本が、若い人から、お年寄りの方まで、幅広く非常に感銘を持って読まれています。

①どれだけ世のため、人のために尽くせたのか。②どれだけ素直に感謝ができたのか。③どれだけ謙虚に生きられたのか、という3点、いわば稲盛語録のようなことが書かれています。本当に大事なことだと思います。

現代は、己さえよければという考えがあまりにも多すぎる。むしろ世のため、つまり他を利するというこ



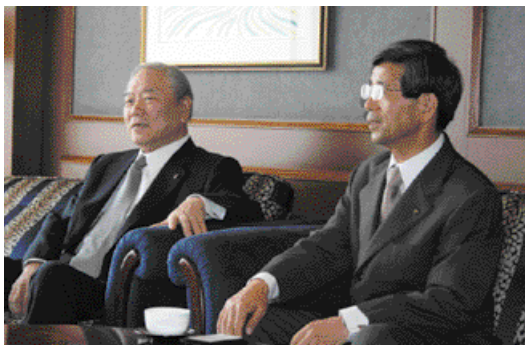
齋藤 俊信 氏

とを、大切にしなければならない。それを稲森さんは利他主義と書いています。

そういうことが素直に放っておいても出るような人間になってほしいなと思っています。

**齋藤** 自分の志は何かということ、大学時代にしっかりと考え、学び、しっかりと持ってほしい。もちろん大学を卒業した後もそうです。それを持っているか、持っていないかで、人生が変わってくると思うのです。

**司会** 二人ともサラリーマンとして企業に入られたわけですが、どこかの時点で「自分は一皮むけたな」という体験や経験をなさっていると思うのです。いまの学生に紹介していただけますか。



**戸田** 企業の合併のための推進を実際にやっていたとき、非常に強く思ったのは、大義があるかどうかが大変重要であるということです。己の会社のためだけを考えお金の力で強引に吸収合併をしていっても、その成果というのは挙がっていないのです。みんなが喜んで、それで合併の後にも、更に勇気百倍仕事を推進できた、みんなが元気が出たという結果をもたらすようになるためにはやはり大義が必要なのです。

**齋藤** 私が、38歳の時に、初めて海外の販売会社の責任者になったオーストリアでのことですが、会社の設立式で会社の考え、経営方針を発表しました。その際、松下電器の掲げ

ている7精神の一番最初に出てくる産業報国について話しました。それからそれぞれの考え方を説明した後、質問はと聞いたときに、現地の社員から勢いよく手が挙がりまして「産業報国の国というのは日本の国のためか」と質問をされたんです。

オーストリアの人から見たら、日本人が来て、そこで自分たちが雇われるという立場ですから、質問された人の心情、向こうの国の人の心情というのを、私はもっともっと深く考えて説明すべきだったと思いました。そこが私としては転換だったと思いますね。

**戸田** 僕は、会社に入って最初に営業、セールスをやっていました。3年セールスをやり、3年営業の内勤もやって、そのあと技術の世界に入りました。僕は経済学部出身ですから、電気回路の論議をされても何も分からない。難しい話ばかりで、眠くてしょうがなかった。

僕は技術部へ移転する前の営業のときに、お客さんはこんな商品を望んでいる、又お店はこう言っていますよ等、新製品に関するいろんなことを事業部に提案しました。それが高じて、結局、自分には技術はないんだけど、お客さんの思いを技術部に伝え、その思いをどんどん商品に入れ込んでいくことが、自分の使命なんだと分かった。

この転勤の目的はそういうことだったんだということが分かった。そしてそれに徹した。このことは自分のスタンスを決める大事な転機になりました。

### ●学生へのメッセージ

**学長** お二人の話を伺い、感じたことですが、大学を卒業して、せっかく企業に採用してもらったのに、3割ないしは4割が1年で辞めていくという現状を考えると、大学において本格的なキャリア教育を行うことが必要です。

キャリア教育の弱さは大学だけではなく高等学校もです。海外での高等学校というのは、社会への準備教育、学校教育としての完成教育をやっている。ところが、日本では、工業高校や農業高校は、しばしば地位が低いという目で見られてしまい、結局、進学重視の学校や教育がいいということになる。

大学はどうかというと、国立大学もキャリア教育をやろうということが提唱されるようになってきたのですが、そうこうしているうちに今度は「大学院へ」という話になってきた。そうすると、また大学が、社会への準備教育、日本の学校制度の完成教育であるんだという意気込みが揺らいできて、キャリア教育と言いながら、大学院の拡充をしていかないと生き残れないのではという風潮があります。

ただし、キャリア教育の位置付けが大きく変わりつつあるのは事実で、大学では、いわゆる企業選択のような就職指導をほとんどやらなくなって、職業観の形成、人生設計意識をもたせることに力点をおくようになっていきます。

企業の側も長いあいだ不況が続いて、安易な正社員の採用はコスト高につながり、企業経営にとってはプラスにならないという厳しい反応があったと思うのです。また、新入社員を温かく長い目でじっくりと育てていくというような余裕を失っていたのではないかとも思います。

多くの学生は、社会へ出て働くということに対して、自分の人間的な生きがいと必ずしもリンクさせていないようにみえます。そうすると、いわゆる手段として働くことを考えてしまい、働くということを一種の



人間の文化として自分が通っていくという発想が、非常に希薄になっている。ところが、よく考えてみると、働くということは人間関係そのものであって、また、それを通じて自己成長していくのです。だから、キャリア教育に力点を置いていかないといけないし、企業の方も、働くということは非常に大事な、人間関係づくりと自己成長のための場なんだということを、どんどん提示していただきたいと思います。

明らかに私たちの時代と違っていると思うのは、多くの学生が人間関係づくりに悩んでいるということです。今年の春、私は両学部の学生諸君と懇談会をやりまして、それぞれ意見を聞いているのですが、滋賀大学で、どういうことに満足しているかと聞きました。すると、共通して出てくる感想が、「入学して人間関係がよかった」というものです。裏を返せば、実は人間関係の難しさとうまくいく期待を彼らは感じているわけです。

10年ぐらい前までは、入学して5月には5%ぐらいの学生が保健管理センターに駆け込むと言われていたのですが、その後10%になりました。そして、いまは、もっとひろがっている。大学を挙げてメンタルヘルスケアに力を入れていかねばならないと考えています。

ただ、大学としては、学び合っていくということの楽しさをつくっていかねばなりません。いわゆるコミュニケーションと言ってもいいと思います。コミュニケーションという場合は、相手を理解することと自己主張することと両方あると思いますが、この両方をやはり楽しめるような形で、どう教育機会としてつくっていくのかということだと思います。

そういう意味で、やはり課外活動の環境を充実させることは重要だと思いますね。

**司会** 会社を早く辞めていく人というのは2種類に分類できると思います。

一つは、自分がやりたいことを学生時代から持っている。ところが、企業の現実、なかなか自分の志を実現するような仕事を与えてくれない。そこでミスマッチが起こってしまい、もっとやりたいことがやれるところへ早く変わったほうがいいという考え方が一つだと思うのです。

もう一つは、自分探し。つまり、問題を先送りし、いつまでも自分探しをやっているような問題先送り型の人も、残念ながらいるのではないかと思います。

大学というのは最後の教育機関として、いつまでもモラトリアム状態にいるような若者をつくらないように教育し、また学生の自覚を促すようにしていかなければならないと思います。

**戸田** 挫折に関することですが、自分の夢が大き過ぎるという時には、いくら成果を待っていても来ない、その結果挫折感を味わってしまうというケースが多いと思います。もっと、身近な達成の喜びを自分で探したら、楽しい仕事なんて、いくらでもできてくるはずなんです。

**司会** やはり、自分で、苦しいけれども仕事のなかに楽しさや喜びを見つけないと、先ほど申しあげた一皮むけたという経験に結び付いてこないと思います。

**齋藤** 国がこれほど、国の教育再生、基本法改正に取り組み、60年ぶりに「教育基本法」が改正され、大学教育が明示されたということが大きいと思います。それと、教育のなかで、いま、愛国心というような言葉が政治的に話題になったんですが、一番大事なことは、いままでに取り上げられていなかった項目が新たに出てきたということです。大学教育もそうですし、家庭教育や幼児期の教育についてもです。さらに、学校、家庭、地域、そして関係者がそれぞれの役割を自覚し、連携協力して教育にあたることという条文が明示されたことが大きいと思います。

**学長** 日本社会は高齢化がこれだけ進んだのに、成熟化が遅れていると言われている。だから、成熟を促進させるためにも、私は改革が必要だと思います。



次号では、特別企画 座談会 第Ⅱ部として、引き続き、戸田、齋藤の両氏に「今後の滋賀大学に期待すること」について伺います。